

中国経済、双循環への過信

中国景気の低迷が世界経済の大きなリスク要因となっている。国内総生産（GDP）ベースで世界全体の約18%を占めており、影響は大きい。現在の中国経済は地政学的リスクによる米中分断抜きに語ることができない。

半導体のような先端分野において米国は中国への投資を厳しく制限し始めた。日本などから中国への直接投資も縮小が続く。過去30年の中国の驚異的な経済成長は外国企業による中国への膨大な直接投資と、中国から海外への輸出の拡大によって支えられてきた。こ



伊藤元重の

エコノウオッチ

の2つの動きに変化が出ており、中国経済が振るわないのは当然だ。

ただ、大きな転機にきているのは、米中対立だけで説明できるものではない。中国経済そのものの変化に注目しなくてはならない。

2020年7月、習近平主席は「国内大循環を主体として、国内外の双循環が互いに促進する新しい経済発展モデルを構築する」という発言をした。

それ以来、中国関係者から双循環という表現を聞く機会が増えている。双循環とは国内の内需と輸出による外需を指すが、この双循

内需重視の成長どこまで

環モデルの中心が国内循環にあることは明らかだ。

中国は08年のリーマン・ショック以降、国内でのインフラや重化学工業への投資を大規模に増やすことにより、諸外国に先駆けて景気回復を果たした。現在に至るまで中国は内需重視の経済発展モデルに移行してきた。

中国が内需重視に転換せざるをえない理由はいくつもある。1つは中国の世界経済におけるシェアが大きくなるにつれ、さらに輸出を増やしていくことが難しくなることだ。中国経済の規模が小さい時期にはいくらか輸出を増やしても問題はなかったが、今やそのような状況ではない。

中国の賃金が高くなり、労働集約産業などでコスト競争力は下がっている。また、中国が大国になるにつれて、何でも自国でできるという過剰な自信が生まれていることもあるだろう。

米中対立の動きの中で、中国は先端分野でのサプライチェーンを全て自国の中に取り込もうという動きを強めている。これも自国経済への過信と無関係ではない。双循環では内需だけでなく、輸出の促進も重視している。ただ、先に述べたような諸要因を考えると、これまでと同じような輸出の拡大を望むことは難しい。

そこで注目すべきは、内需中心で中国がどこまで成長を続けられるのかということだ。1960年代の日本経済のように、重厚長大型産業を柱にした内需中心の高成長は考えられる。中国の専門家もこの時期の日本の成長に触れることがある。

ただ、日本の内需型の成長は石油ショックでもろくも崩れた。過剰な内需型投資は、資源価格の変動に弱い面がある。また、最近話題になることの多い中国の不動産市場の状況を見ると、内需刺激による経済運営は大きなゆがみをもたらすことにもなりかねない。いずれにしても、内需中心で高成長を維持することは容易ではない。

（東京大学名誉教授）